



エイジング・イン・プレイス（地域居住）と高齢者住宅  
日本とデンマークの  
実証的比較研究  
松岡洋子著 新評論 3675円

松岡洋子さんより：「エイジング・イン・プレイス（地域居住）」とは、日本流に言えば「住み慣れた地域で、その人らしく最期まで」ということである。

2005年特別養護老人ホームの国庫補助が打ち切られ、2006年からは介護保険に地域密着型サービスが登場して、制度上は「エイジング・イン・プレイス」の道程を歩み始めた。

しかし、この概念に込められた「地域で自立して生きる」ための高齢者住

宅の建設や在宅24時間ケアの整備は一向に進まないのが現状である。

「エイジング・イン・プレイス」という概念とそれを支える理論を整理しながら、アメリカ、イギリス、オランダ、デンマークの現状を紹介する。その上で「住まいとケアの分離」によって独自の道を歩んだデンマークに着目し、日本・デンマーク両国の高齢者住宅住人へのインタビュー調査等によって、日本の課題を実証的に明らかにしていこうというのがねらいである。

住人の声に耳を傾けることによって明らかとなったのは、彼らが、施設に移り住むことなく高齢者住宅で最期を迎えたい、と強く望んでいる姿であった。地域に開かれた自立型住宅づくり、在宅24時間ケアの整備、住宅での看取りなど、世界視野とエビデンスに基づく研究から、今なお施設依存の強い日本が忘れて重要な視角が見えてくる。

第1章 エイジング・イン・プレイス（地域居住）とは

第2章 「住まいとケアの分離」理論

第3章 地域居住へ向けての各国の取り組み

第4章 デンマークにおける地域居住と高齢者住宅

第5章 日本における地域居住と高齢者住宅

第6章 日本とデンマークにおける高齢者住宅住人調査

終章 未来へ向けての考察と提言